自　然

鷲尾弘範
（高田学会）

一

宗祖晩年の和語聖教に「自然」の文字が、数多く見うけられる。宗祖が特にこの文字に注目されたのは、真実の教と仰がれた「大無量寿経」に基因すると考える。即ち、「大無量寿経」には、「自然」の文字が五十五回にわたって示されており、その数の上からも、「大無量寿経」は正に「自然」を説いた経典と言えるのである。この「自然」に真実の教をいただかれたのが、宗祖の仏法であり、特に晩年にこの「自然」の文字が目立つ点から考えれば、究極的には、宗祖の念仏の教えは、実に、この「自然」にあるといっても過言ではないと考える。

そして更に、直接的には師法然上人のお導きである。末燈鈔第五通の「自然法爾事」に

「自然とはまふすぞときゝてさふらふ」

「弥陀仏とまふすとぞきゝならひてさふらふ」

とあるよりみても、このことは明らかである。

では、法然上人は、この点をいかに領会せられていたかをみるに、「自然」の文字はないが、和語燈巻五に「諸人伝説の詞」として「念仏問答集」を引いて、

「法爾道理と云事あり。炎は空に登り水は下りさまに流る。菓子の中にすき物あり甘きものあり此等は皆法爾の道理なり。阿弥陀仏の本願は名号を以って罪悪の衆生を導かんと誓玉ひたれば只念仏だに申せば仏の来迎は法爾の道理にて備はるべき也」

と述べ、上人伝記なる「四十八巻伝」巻二十一にも「上人つねに仰せられける御詞」としてこの法語を載せてあるよりみても、法爾道理において、他力義を静かに提唱せられていたことは、よく伺われるところである。

宗祖は晩年、特に師法然上人の御教えを頂戴される御心境であったようで、「三部経大意」や、「選択集延書」の書写をされたり、また、法然上人の法語・行状等に関する旧記を集録した「西方指南鈔」を写伝なさっているが、この「西方指南鈔」中本には師の言葉として、

「念仏はやうなきをもてなり。名号をとなふるほか一切のやうなき事也といへり」

とあり、また、上人の法語を集めた「祖師一口法語」の初めには、

「称名念仏は様なきをもて様とす。身の振舞心の善悪も沙汰せず念仏だに申せば往生するなり」

と言われた「様なきを様とす」の言葉は、この法爾道理をあらわすものである。

宗祖はこの元祖の法爾道理に「自然」あるいは「則」の字をもって他力不思議の願海を表現なさったのである。

二

先述の如く宗祖が真実の教と選択された大無量寿経に用いられる「自然」の用例を古来三種に分って、無為・願力

・業道の三自然となしている。概して上巻には（願文・浄土の依報正報）無為自然の表現象徴が多く、下巻においては、願力自然を説かんがために、業道自然が詳説せられてあるようである。

無為自然とは真如無為法性法身即ち無上涅槃の妙理にして本有常住の法である。因縁を離れ、四相に遷されざる真理、諸法の真実体を現わす文字である。大経には極楽世界を「無為自然の境界」と言い、浄土の人を「自然虚無の身、無極の体」と表現している。これらは皆、この無為自然の全顕したものなるをあらわす言葉である。しかれば、真如法性は元来自然法爾の法にして無為常住のものであるから、これを無為自然と名付けるのである。

願力自然とは、弥陀の浄土に往生するには、弥陀の願力によって自然に往生するをいう。即ち、誓願の力用の自然であることをあらわす言葉である。大経下巻に

「其国不三逆違一自然之所レ牽」

とあるを宗祖は、銘文に、

「真実信をえたるひとは、大願業力のゆへに、自然に浄土の業因たがはずして、かの業力にひかるるゆへにゆきやすく無上大涅槃にのぼるにきはまりなしとのたまへるなり。しかれば自然之所牽とまうすなり。他力の至心信楽の業因の自然にひくなり」

と説かれるが如くである。

第三の業道自然とは、善悪の業因によって自然に善悪の趣を感じ種々の果報を受くるのを言う。この自然については、後で述べるのでここでは略しておくが、とにかく、自然はこのように三つにわけて考えられているのである。宗祖の「自然」の文字も分析すれば、すべてこの三つのいずれかにおさまるわけであるが、真実証の立場から考察してみたときに、この無為・願力・業道の三自然が、むしろ融然一体として身証されているところに、真宗の独自性があ

るとみたい。

三

真如には三要素があると「大乗起信論」に説かれている。即ち

「一者体大謂一切法真如平等不増減故
二者相大謂如来蔵具足無量性功徳故
三者用大能生一切世間出世間善因果故」

とあり、所謂、体相用の三大である。

「体」とは「もと」即ち本体、物自体、本然としてあるものということである。「相」とは「かたち」即ち、すがた、ありさま、形体のことである。「用」とは「はたらき」即ち功用、能力ということである。

今、自然の三つの面である三自然を、この三大の要素から考えてみると

無為自然――体
業道自然――相
願力自然――用

ということになる。三大は真如の三つの要素であり、どの一つが欠けても全うなものとはなり得ない。一つのものの三つの面である。切り離してとりあげるのは、思考上の便宜のためであって、本来、三はそのまま一である。

宗祖の「自然法爾」は、実はこの三自然が一体となったところの極意であると私はいただく。この真髄をこまやかに説かれたものが、末燈鈔第四通の「自然法爾事」の一文である。簡易にして、しかも鮮明に真宗安心の奥義が尽さ

れているのでここに全文を引き一考してみたい。

自然法爾事

自然といふは、自はをのづからといふ、行者のはからひにあらず、然といふはしからしむといふことばなり。しからしむといふは行者のはからひにあらず、如来のちかひにてあるがゆへに法爾といふ。法爾といふは、この如来の御ちかひなるがゆへにしからしむるを法爾といふなり。法爾はこの御ちかひなりけるゆへに、をよす行者のはからひのなきをもて、この法の徳のゆへにしからしむといふなり。すべてひとのはじめてはからはざるなり。このゆへに義なきを義とすとしるべしとなり。自然といふは、もとよりしからしむるといふことばなり。弥陀仏の御ちかひの、もとより行者のはからひにあらずして、南無阿弥陀仏とたのませたまひてむかへんと、はからはせたまひたるによりて、行者のよからんとも、あしからんともおもはぬを、自然とはまふすぞときゝてさふらふ。ちかひのやうは、無上仏にならしめんとちかひたまへるなり。無上仏とまふすは、かたちもなくまします、かたちもましまさぬゆへに自然とはまふすなり。かたちましますとしめすときには、無上涅槃とはまふさず。かたちもましまさぬやうをしらせんとて、はじめて弥陀仏とまふすとぞきゝならひてさふらふ。弥陀仏は自然のやうをしらせんれうなり。この道理をこゝろえつるのちには、この自然のことはつねにさたすべきにはあらざるなり。つねに自然をさたせば、義なきを義とすといふことは、なを義のあるになるべし。これは仏智の不思議にてあるなるべし。

正嘉弐年十二月十四日

愚禿親鸞八十六歳

この冒頭の一節から推すに、「おのづからしからしむる」は正しく願力自然である。この「おのづからしからしむ

る」誓い、即ち誓願は如来の誓いであり、如来より発起せしめられた誓いである。この如来は無為自然であり、その「しからしめられる」ところが、行者の「はからいにあらず」であり、ここに、信が業道自然として語られている。かく、願力・無為・業道の三自然が融然一体として表現されているのである。

四

次に注意すべきは、「自然」と「法爾」とのかかわりあいである。「しからしむる」という点においては同じであるが、如来の誓いというところに法爾がある。

「如来のちかひにてあるがゆへに法爾といふ」

「この如来の御ちかひなるがゆへにしからしむるを法爾といふ」

「法爾はこの御ちかひなりけるゆへに」

という表現よりみても、これは明らかである。自然本来の一如の性質に如来が全入して自然が法爾となる。この自然が法爾となったその自然について宗祖は更に

「自然といふは、もとよりしからしむるといふことばなり」

から始る一節において再びその核心に触れてお説きになる。この第二ともいうべき自然は、法爾に裏づけされた願力自然である。この自然のしからしむる根源的帰依処は、無為自然なる弥陀仏である。無為自然であれば、かたちもましまさぬ自然である。

「弥陀仏は自然のやうをしらせんれうなり」

といわれる所以がここにある。このかたちもましまさぬ弥陀仏が南無阿弥陀となる。即ち、無為自然が南無阿弥陀仏

とたのませたまひてむかへんとはからはせたまひて行者を迎えんとはからはせたまふところに、行者のよからむとも、あしからんとも思はぬ義なきを義とする自然が業道自然として展開するのである。

無為自然が南無阿弥陀仏となって、われわれの現実生活にはたらきかける。

われわれはいかにしても、業から離脱することは出来ぬ。それはわが存在は業によって支えられているからである。しかしながら、われわれはここに生を享けつつ、業よりの解脱を願うものである。この願いに応えるものは、久遠劫よりの如来の願力である。業が願力に照し出されるところ、業は願力の真実の光によって自然に業道へと帰せしめられる。ここに、業道自然が存する。よって業道自然とは、真実存の境であり、自然法爾の境界である。宿業を宿業として自覚せしめ、無有出離之縁の身のままに、摂取される世界、即ち業道を業道と知る仏智と一如なるところに、業道自然が知らしめられる。この心証こそが業道のままに救済せられる唯一の道であり、他力救済の核心なのである。

五

この救済の核心が「自然」とのかかわりにおいて、唯信鈔文意「観音勢至自来迎」の御釈に

「自然といふはしからしむといふ、しからしむといふは、行者のはじめてともかくもはからはざるに、過去・今生・未来の一切のつみを善に転じかへなすといふなり。転ずといふは、つみをけしうしなはずして善になすなり。」

といただかれている。行者のはからわざる自然のところに、一切のつみをけしうしなはずして善に転じかへなすといわれる。ここに業のままの救い――業道自然が現生不退として述べられるのである。よって文意はつづいて、

「行人のはからひにあらず、金剛の信心となるゆへに正定聚のくらゐに住すといふ。―乃至―これ自然の利益な

りとしるべし。」

と述べられ、また、銘文には、

「自はおのづからといふ、おのづからといふは衆生のはからいにあらず、しからしめて不退のくらゐにいたらしむとなり。自然といふことば也」

とお説きになるのである。ここに正しく現生正定聚が「自然」の文字によって説かれているのである。無為の光につつまれたわが身のいたみにおいて感得せられる現生正定聚が、自然の利益として説かれる。この現生正定聚を一念多念文意には、

「不可思議の利益にあづかること、自然のありさまとまふすことをしらしむるを法則とはいふなり、一念信心をうるひとのありさまの自然なることをあらわすを法則とはまふすなり。」

と法則の文字をもって明確にして力強くお説きになり、この「法則」の文字に

「コトノサダマリタルアリサマトイフココロナリ」

と左訓されている。一念信心は「自然」であり、「必定」であり、「摂取不捨」である。

「仏智の不思議にてあるなるべし」

と結ばれた末燈鈔のお言葉に、宗祖のやすらぎと、よろこびと、力強さをこの「自然」の文字にいただくのである。